土や草木と触れあい「なるせ自然共和国」

津・北部の丘陵にオープン

丘陵を生かした「なるせ自然共和国」＝津市河芸町三行、小型ドローン使用

津市北部の丘陵に、土や草木と触れあい、鳥や虫などと出合える自然体験・野外学習施設「なるせ自然共和国」が1日、開園した。住宅の庭や外構などを手がける会社が事業主体。人と大地との関わりを子どもたちに理解してもらいたいという女性の思いが原点だ。

津市河芸町三行の山林や原野を開き、田畑とつなげて造った施設の広さは約6千平方㍍。津市上弁財町の住宅エクステリア会社「渡辺硝子（ガラス）」（渡辺健治社長）が事業主体で、取締役の渡辺智子さん(37)が施設責任者を務める。土地は渡辺さんたちの私有地だ。

智子さんは、仕事で住宅の庭づくりや外構工事を担うなか、「雑草の管理が大変なので庭を覆いたい」という要望が増えてきたことを痛感。幼稚園児から中学生までの3人を子育て中の智子さんは「子どもたちが土遊びをしたり、草木と触れあったりできる場を三行の丘に造ろう」と思い立った。

以前から、景色がよく、風が心地良い丘陵の活用を考えていた智子さんらは、本業をしつつ週末などを利用して山林や竹林、原野を草刈り機などで開墾。ドングリのなる木や紅葉する木を植えてきた。2年かけて整備した野外施設は、地元の小字成瀬から「なるせ自然共和国」と命名した。

敷地は市街化調整区域内にあり、新たな建築が認められないため、循環型水洗トイレを全国展開する「アルコ」（津市藤方）に協力を依頼。移動可能で水道や電気などのインフラなしで利用できるコンテナサイズのトイレを設置するとともに、環境技術監修として事業にも加わってもらった。

智子さんは「近隣の幼稚園や保育園、小学校には無料開放する。土遊びを楽しんでほしい」と話す。季節の野菜づくりも、敷地内の畑でこうした子どもたちと取り組みたいという。

5日午前10時半から現地で、地域や子どもたちに向けたお披露目イベント「もちまき&南京たますだれ」を開く。12月には凧（たこ）づくり、凧あげのイベントも予定する。活動に協賛している「道の駅津かわげ」に駐車できる。

問い合わせは渡辺硝子（059・227・7471）か、なるせ自然共和国ウェブサイト（https://narusenooka.com/）から。（菊地洋行）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。